

還田 隆コーディネータより退職のご挨拶

お世話になっております。

平成18年4月に山梨大学に着任しまして、この3月末にて定年退職を迎えることとなりました。そこで、少し過去を振り返りながらご挨拶をさせていただきます。なお文面の中で、以前に山梨工業会平成29年度会誌へ投稿した内容を流用しておりますので、本学卒業の皆様には「見たことあるぞ」となりますことご容赦ください。

さて、平成18年の着任部署は、工学部キャンパス（武田キャンパス東側）の北部に位置している地域共同開発研究センター（当時の名称で現在はプロジェクト研究棟）でして、当センターの専任教員として着任いたしました。

私の前任者の時より民間からの公募となったと聞いておりますが、それ以前では工学部の教員が2年程度の交代制で着任していたと聞いております。

変わったきっかけとしましては、当時の地域共同開発研究センターが山梨大学に於いて唯一地域との連携窓口となっていたこともあり、技術移転も含めた連携活動は企業目線の人材が良いのではという意見からと聞きました。

着任当時の上司に当たるセンター長は、工学部機械工学科教授の岡田勝蔵先生でして、ご専門はトライボロジーでした。岡田先生には大変お世話になりましたが、とりわけ退官記念講義の際に宇宙工学用材料のお話が聞けまして大変印象的でした。

当初の業務範囲としては専ら産学連携に従事するようにとの内容で、センター内の設備を含めた施設管理と各研究室の入退去審査や日常の庶務等のほか、平成16年度に本部へ創設されていた知的財産戦略本部ならびに以下に述べる株式会社山梨ティー・エル・オーと連携して、企業・自治体等との共同研究についての契約業務や、競争資金申請の支援、学内外の研究成果発表のための展示会企画などを通じた技術移転を目指したマッチング活動に専従しておりました。

当時は、地域共同開発研究センターの中に「株式会社山梨ティー・エル・オー」がありました。平成10年8月に大学等技術移転促進法（TLO法）が施行され、これに基づいて当社は平成12年9月21日付けにて設立され当センターへ入所しておりました。

私が着任した時は、上述の知的財産戦略本部と同じ本部棟の3階フロアーへセンターから山梨ティー・エル・オーが移動しておりました、私の執務机も地域共同開発研究センターと同フロアーとの2カ所にありました。実質はこの3階フロアーが産学連携と知的財産の執務場所となっていて、現在に繋がっております。なお、当社は平成20年3月31日に閉鎖されまして、翌日の4月1日に山梨大学内へ承認TLOとして組み込まれております。

その後は諸々ありまして、地域共同研究センターはインキュベーションセンターとして「企業等への入居スペース貸し出し施設」になり、さらに学内者向けスペース管理も行う施設管理部門へ業務が移り「プロジェクト研究棟」と改名されました。

このことで、私の業務から施設管理は外れることとなりまして、主には、①研究に関連する契約業務、②大学の研究成果等を広め共同研究へつなげるための展示会や相談会への企画と実施、③地域と連携をすることを主に目的としたTLO時代の「協力会」を改めまして「新技術情報クラブ」につないでいくこと、そして④国等の競争資金を獲得して行くための支援、⑤金融連携を中心とした「山梨大学客員社会連携コーディネータ制度」の運営、などになりました。

そして、時代の流れとともに産学連携のボリュームが増大することにより、近年ではほぼ④については新しい部門（旧URAセンター）へ渡していきました。

この辺りまでが過去を振り返っての内容です。

皆様とは③の接点でお近づきさせて頂いておりますが、今までも時折思っていたことの中で「大学が一方向的に運営することの限界」があります。

どうしても大学目線で考えると、大学研究者のシーズ紹介や大学が新しく特許出願をした内容の紹介にとどまってしまうておまして、真のビジネス構築や地域貢献へ資することができていないのではないか、と自問してきておりました。一つの試みとしてアカデミックサロンが立ち上がりました。

企業様のニーズに対して研究者面談を行いながら「企業様の役に立っている」と勝手な思い込みをしている可能性は否定できません。たとえば、やまなし産業支援機構が実施しているハンズオン支援に比べると「ビジネスに関わるお節介度が低い」という面は否定できないと思っております。

さはさりながらアカデミアとしての立場として制約もありますが、これから私の後任たちがこの点を改善してくれると期待しながら、私も大学の外から微力ながら手助けできる様務めたいと思います。

本当に皆様にはご支援賜りましたことを感謝しております。これからは個人として皆様と繋がりを持っていければと思いますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

新任のご挨拶 U R A ・社会連携センター 田澤 茂 特任助教

1月17日よりURA・社会連携センターに着任いたしました田澤 茂と申します。前職では外資系化学メーカーにてライフサイエンス研究に使用される製品の品質保証業務・研究開発などに携わっておりました。またこれまでに、遺伝子工学や分子生物学を修めこれに関連する業務として医療機器メーカーにてクラスIV医療機器の研究開発業務や化学分析業務、毒性・安全性試験業務に携わってまいりました。

山梨大学での研究成果をこれまで以上に社会に還元することで、よりよい社会を構築できるものと考えております。これに貢献できるよう努めて行きたいと思っておりますので、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。



【発行 2022年3月25日】

国立大学法人 山梨大学

研究推進・社会連携機構

新技術情報クラブ事務局

〒400-8510 山梨県甲府市武田4-4-37

TEL : 055-220-8758

FAX : 055-220-8757

E-mail : renkei-as@yamanashi.ac.jp

URL : http://www.scrs.yamanashi.ac.jp/

大学TOPICS

山梨大学シミックプラザ完成

山梨大学医学部キャンパスに「山梨大学シミックプラザ」が完成、令和4年3月3日(木)に竣工式を挙行了しました。シミックプラザは、本学と連携協定を結んでいるシミックホールディングス株式会社にご協力いただき、医療に携わる学生・教職員のための福利厚生施設、教育・研究・診療における拠点スペースとして設立されました。

建物は延べ床面積773平方メートルの鉄筋コンクリート造2階建てで、1階を主に学生のための「ラーニングcommons」や昼食や休息をとるスペースとして使用するほか、セミナーや発表会等の開催が可能な「プレゼンテーションホール」(シミックホール)を完備しております。また、2階は主に教職員のための会議室やセミナー室を設置し、教育・研究・診療に係る打合せスペースとして活用します。

竣工式で、島田眞路学長はキャンパスに学生や教職員の交流の場がなかったことなど整備に至った背景に触れ、「この施設を学生や教職員の憩いの場として活用していきたい」と挨拶しました。シミックホールディングス株式会社代表取締役CEOは「学生や若い研究者がこの施設で議論し、新たな化学反応が起きる事を期待している」と祝辞をいただきました。

大学では、「シミックプラザ」を産学連携にも役立てたいと考えています。



シミックプラザ外観



談話スペース



グループリーニングエリア



挨拶をする島田学長



祝辞を述べる中村CEO

新技術情報クラブ報告

「第28回アカデミックサロン(オンライン)」を開催しました！

2022年1月25日(月)「第28回アカデミックサロン」をオンラインにて開催しました。

新型コロナウイルス感染症の影響で、2020年2月を最後に、開催を見合わせていましたアカデミックサロンですが、約2年ぶりに開催しました。今回は、大村記念学術館にて開催を予定していましたが、最近の感染増加を受け急遽オンラインでの開催となりました。

当日は、本学教員1名によるオンライン講演を行い、会員等11社14名のご参加を頂きました。講演は工学部土木環境工学系 基礎教育センターの准教授井上久美先生により「デジタルヘルスのためのセンサ開発と細胞間物質移動をイメージングする顕微鏡への展開」と題してご講演を頂きました。

専門分野とすれば、バイオセンサー、バイオイメーキングがご専門で現場経験を生かされながら他分野の研究者とも連携する中で、電気化学センサデバイスなどを構築されております。

また研究成功例としてスマートセンサや尿センサなどの実用化を目指した、スマートトイレ、かけるだけの尿蛋白センサなどの研究について実装化につながる可能性の高い興味深いお話を伺いました。

今回のアカデミックサロンに於いては、今後先生の成果の中から、皆様の会社等で開発される商品への応用などの連携も期待できるのではないかと思います。

今年度はコロナ禍の影響を受け開催回数は減少を余儀なくされましたが、何とかオンラインにて開催することが出来ました。講演終了後の質疑応答ではリアル講演と同様に活発なやり取りがありました。今後も会員の皆様のニーズをくみ取る中、有意義な交流会となるべく努めていく所存です。

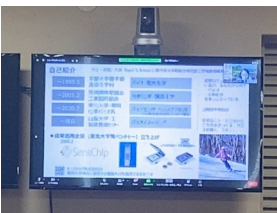
まだまだ予断を許さない状況ではありますので、以前のように飲食をしながらとはいきませんが、今後とも感染予防対策を取る中で、皆様にお会いできるのを楽しみにお待ちしております。



講演タイトル画面



質問に答える井上先生



講演中のZoom画面のようす

大学TOPICS

令和3年度「医療機器産業技術人材養成講座」閉講式を挙

令和4年2月15日(火)医学部キャンパスにおいて、令和3年度「医療機器産業技術人材養成講座」閉講式を挙りました。本学と山梨県では、安定的な成長が見込まれる医療機器産業への県内企業の参入促進を目的に、設計開発技術者を養成する講座(やまなし地域活性化雇用創造プロジェクト)を毎年開講しており、今年度は22名が修了しました。閉講式では、島田眞路学長が「本講座で学んだことを活かして今後も新しい製品開発に取り組んでほしい」と、小林厚山梨県産業労働部長が「医療機器開発は様々な困難が伴うが、成長が見込まれる分野である。今回の経験で培った技術を発展させ、新製品を生み出すことを期待する」とそれぞれ挨拶し、修了生の今後の活躍に期待を寄せました。その後、岩崎甫 副学長・融合研究臨床応用推進センター長から修了生及び皆勤賞受賞者の代表者に修了証書・「山梨大学医療機器設計開発士」認定証や賞状が授与されました。現在、来年度の「医療機器産業技術人材養成講座」の受講生を募集しております。医療機器産業は、コロナ禍、高齢化などの新たなニーズの高まりにより、ますます期待できる産業分野です。また、本県のものづくり企業が培ってきた高度な技術が活用できる産業分野でもあります。ぜひ医療機器産業参入をお考えの企業の技術者のみなさまのご参加をお待ちしております。詳しくは、医療機器産業技術人材養成講座HP <https://www.yamanashi-iryokouza.com/> をご覧ください。



閉講式の様子



挨拶をする島田学長



挨拶をする小林県産業労働部長



修了生代表者との写真撮影



岩崎副学長より修了証・認定証を授与される修了生

令和3年度「水素・燃料電池産業技術人材養成講座」成果報告会・閉講式を挙

令和4年2月2日(水)大村智学術記念館において、令和3年度「水素・燃料電池産業技術人材養成講座」成果報告会・閉講式を挙りました。本学と山梨県では、燃料電池関連産業分野における県内企業の参入促進を目的に本学が持つノウハウを活用して水素・燃料電池関連製品の設計開発技術者を養成する講座(やまなし地域活性化雇用創造プロジェクト)を2016年から毎年開講しています。今年度は21名が受講し、全員が修了しました。成果報告会で修了生がグループごとに、講座内容を踏まえて考案した燃料電池アプリケーションのプレゼンを行いました。鉄道模型を走らせ水素社会をイメージし水素社会を啓発する教材としたジオラマをはじめ、災害時の使用を想定した・FC搭載バックパック・ポータブル充電装置・スピーカー機能内蔵の加湿空気清浄機などの説明があり、アイデアの斬新さや実現の可能性について、審査員による講評が行われました。閉講式では、島田学長が「世界に誇る本学の技術を学んだ皆さんが、今後社会で燃料電池分野を発展させ、ご活躍する事を願っています」と述べ、小林厚 山梨県産業労働部長は「本講座で学んだ山梨大学の最先端の技術を様々な分野活用し、新しい発想で世の中のニーズにあった製品の開発につなげてください」と挨拶し、修了生の今後の活躍に期待を寄せました。その後、修了生及び皆勤賞受賞者の代表者へ、飯山センター長より証書や賞状が授与され、受賞者代表がこれまでの感謝と今後の決意を述べました。現在、来年度の「水素・燃料電池産業技術人材養成講座」の受講生を募集しております。2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現へ向けて注目を集める水素の仕組みから製品技術、開発プロセスなどを業界の第一線で活躍する講師陣から学ぶことができます。受講後のサポートもいたしますので、ご興味がある企業の技術者のみなさまのご参加をお待ちしております。詳しくは、水素・燃料電池産業技術人材養成講座HP <https://sway.office.com/xUsAOCNdYWMXNjEk?ref=Link> をご覧ください。



飯山センター長より受講生へ修了証書授与



「FCバックパック」グループの避難時用FCバックパック



「FC電車でGO!」グループのFC電車の教材用ジオラマ



「エール・ワン」グループの燃料電池内蔵空気清浄機



成果報告会・プレゼンを聴講する様子

コーディネータ による【研究者紹介】

生命工学科 山村 英樹 准教授

今回は、生命環境部生命工学科の山村英樹准教授をご紹介します。先生は、抗生物質などを生産することで知られている産業上重要な放線菌という微生物について研究を行っています。特に放線菌を環境中から分離する方法の開発、遺伝子解析や抗菌活性、化合物の同定について研究を行っています。そもそも放線菌とは、菌糸を放射状に伸ばして増殖する細菌の一種で、結核などの感染症を引き起こす細菌に対する抗生物質を作り出す働きがあることが知られています。ワックスマンがストレプトマイシンを発見したことが契機となって、数千にも上る抗生物質が種類の放線菌から見つけられました。この他に抗生物質や酵素たんぱく質などの菌体外分泌能力が高いことから、医薬品や化粧品、食品などのあらゆるところで重要な役割を果たしています。これまで、医薬の分野では製薬企業などが創薬起源としての放線菌にニーズがあり、未知なる放線菌を自然界から分離する技術の開発などについて共同研究が行われてきました。、この他にも、植物の生育を促進する物質を生産する事が知られており、水耕栽培への応用も検討されています。山村先生の応用微生物学研究室では、放線菌を環境中から選択的に分離する技術を開発しています。腐食酸ービタミン培地 (HV agar) や再水和遠心法 (RC法) は、世界的な放線菌の分離法として使われています。これまでの微生物利用産業は、新しい菌株を自然界から分離・保存し有用機能を開拓するさまざまな研究によって 飛躍的な発展を遂げました。そして今日、醸造品、食品、農薬、医薬さらに化学製品などの生産を通じて、バイオテクノロジーの根幹を放線菌を含む微生物が担っています。これまで見出された微生物の種類はおよそ 10 万種であると言われ、この数は実際に地球上に棲息している数の 20 %にも満たないと云われています。このことは、新しい機能を持つ未知の有用微生物が自然界にまだまだ数多く存在していることを意味しています。特に、土壌微生物群の中には、バイオサイエンスの発展を促し、人類に貢献できる無数の有用菌が潜んでいることが推定されることから、山村先生の研究室では、特に医薬品工業の主役である土壌微生物・放線菌に着目しているとのことです。また、同研究室では、放線菌の新しい利用方法を開拓すべく、連作障害に強い土づくり資材や病原菌に有効な抗菌活性を有する放線菌を含んだ微生物資材の開発、そして、水耕栽培等における成長促進効果を有する放線菌の探索や機能解析などにも取り組んでいます。会員の皆様、ご紹介しましたような微生物の活用に興味がありましたら、お気軽にご相談ください。



山村英樹准教授(研究室にて)

助成金等公募情報

【(公財)市村清新技術財団】新技術開発助成

市村清新技術財団の助成は、広く科学技術に関する独創的な研究や新技術を開発し、これを実用化することによって、我が国の産業・科学技術の新分野等を醸成開拓し、国民生活の向上に寄与することを目的としております。本助成は「独創的な新技術の実用化」をねらいとしており、基本的技術の確認が終了し、実用化を目的にした開発試作を対象にしています。また、地域環境保全、特に地球温暖化防止は重要と考え環境分野を設け技術開発を支援します。

- ◆助成金額 試作費合計額の4/5以下で2,400万円を限度
- ◆受付期間 令和4年4月1日～4月20日(第1次受付) ※第2次は10月
- ◆申請方法 Web登録システム、郵送
- ◆お問い合わせ先 (公財)市村清新技術財団 ☎(03)3775-2021 ✉zaidan-mado@sgkz.or.jp

その他詳細はHP https://www.sgkz.or.jp/download/newtech/download.html?sscl=ZD_top_now_newtech をご覧ください。



JSTでは、令和4年度A-STEP「トライアウト」「産学共同(育成型/本格型)」及び「企業主体」において、新規研究開発課題の公募を予定しています。詳細につきましては、公募開始後、JSTのHP (<https://www.jst.go.jp/a-step/>) をご覧ください。また、令和3年度のA-STEP「企業主体(返済型)」は令和4年3月31日(木)まで募集しています。